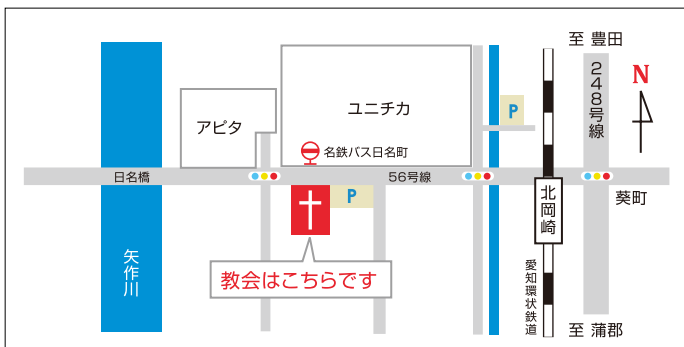


# BIBLE + MESSAGE

主の息吹がその上に吹くと、草はしおれ、花は散る。まことに民は草だ。草はしおれ、花は散る。しかし、私たちの神のことは永遠に立つ。  
(イザヤ 40 章 7～8 節)

聖書は、人間を草や花にたとえています。草花は大変美しく、見る人の心を楽しませたり、和ませたりします。しかし、「草はしおれ、花は散る」とあるとおり、その美しさはいつまでも続くものではありません。それと同じように、どんなに充実した人生を歩んでいる人であっても、やがては老い、その生涯を終えるときが来るのです。一方、永遠になくならないものがあります。それは「神のことば」である聖書です。聖書が完成したのは、今から 2000 年近くも昔です。しかし、聖書は多くの人々によって語り継がれ、現代においても変わることなく存在し続けてきました。時代は次々に移り変わっていきます。しかし、神のことは永遠に立ち続けるのです。さらに、永遠に無くなることのない神のことは信じる者もまた、永遠のいのちを得ることができると聖書は教えています。



- ◆名鉄バス「日名町」前
- ◆愛知環状鉄道「北岡崎駅」から西へ徒歩3分
- ◆アビタ北岡崎店 筋向かい



スマホで上記のQRコードを読み込むと地図を表示できます。

【日曜学校】日曜：午前 10 時～ 10 時 45 分 【礼拝】日曜：午前 11 時～ 12 時半  
【午後の集会】日曜：午後 3 時～ 4 時半 【祈祷会】木曜：19 時半～ 21 時

## 聖書を読んだ日本人

(6月号からの続きです)

「光るネオン」の発明によって後にパリの万国博覧会で優秀発明賞を受賞する大ですが、学生時代にもう一つ、優れた発明をしています。それは音を光に変え、その光を再び音に変える「光の電話」でした。この発明の実験は大学の屋上と、1キロ半ほど離れた場所にある新潮社の屋上とを結んで行われました。実験を見ていた新聞記者たちは大変驚き、大を質問せぬにします。それほど、この発明は画期的なものだったのです。新聞各紙は大を「学生発明家」と書き立てました。しかし、当の本人は照れくさかったようです。このように、大学において自由

に研究を続けていた大でしたが、毎日のように聖書を読むことを欠かさなかったそうです。また、日曜学校になると富士見教会に行き、日曜学校の子どもたちに聖書を教える奉仕もしていました。大と同じ寮(友愛学舎)で委員長をしていた原田三男は「井深くんは愛の人。奉仕の人でした」と語っています。日曜学校の子どもたちも、そんな大先生を慕っていたのではないのでしょうか。

さて、大学卒業が近づいたころ、大は就職のために東京芝浦電気(現在の東芝)の入社試験を受けます。しかし、就職が難しい時期だったこともあり、大は試験に落ちてしまうのです。大は後に、「大



日曜学校で子どもたちに聖書を教える大(伝記の挿絵より)

学での勉強が偏り過ぎていた」と、当時の失敗を振り返っています。そんな大でしたが、PCL(Photo Chemical Laboratory: 写真化学研究所)という映画の音声録音する会社に招かれ入社することになります。学生時代から大が研究していた光を音に変える研究は、映画にも応用できる技術でしたから、まさに打ってつけの就職先だったのではないのでしょうか。(次号に続く)



井深大  
(いぶかまさる)  
1908年～1997年